

「心の声が聞こえますか？」

私の子どもの頃の話聞いてください。

私は、家族の中では普通に話ができるのに、学校では話すことができない子どもでした。

「なんで、さっちゃんはやべらないの？」

「なんで、さっちゃんは下を向いているの？」

何回聞いただろう。何回繰り返されただろう、同じ問い。

私はうつむき続ける。

「聞いてもむだむだ。さっちゃんいつも無視してるよ」

無視なんてしてない。聞こえてるよ。痛いよ。

ただ、答えられないだけ。自分でもわからない。

いつのころからか、私は家族以外と口をきけなくなってしまった。

きかなくなったのではない。「きけなくなった」のだ。

原因はわからない。

小さい頃は、それでも何人かの友達と、小声で話していたような気がする。

でも、いつのころからか、少しずつ、少しずつ、私はうつむき始めた。

もともと、他人はこわかった。

保育所の頃から、他人の中にいるのは苦痛で仕方がなかった。

おもちゃをとりあって泣き叫んでいる友達を見るたびに、心臓がどくんどくと音を立てた。

悪口は全て、自分に向けられているように傷ついた。

叱られている友達を見るたびに、自分も叱られているような気がして、胸がきりきりと痛んだ。

シカラレタクナイ・ケンカシタクナイ・シツパイシタクナイ

そんなことをしたら嫌われてしまう。キラワレタクナイ……

いつもびくびくと何かにおびえているような気持ちが今も胸に残る。

「楽しそう、やってみたい」と思っても

「失敗したらどうしよう。みんな、笑うかもしれない」と思って動けなくなる。

そんなことを何度も何度も繰り返しているうちに、私は自分からは何も始められなくなっていった。

しかし、もともとおとなしかった私のそんな変化に、いったいどれほどの人が気づいていただろう。

少しずつ、でも確実に一歩を踏み出すことができなくなっていった私。そして、小学校に入る頃には、すっかり「しゃべらない子」「なにもしない子」「変な子」として定着していた。

それでも低学年の頃の私は、まだ「害」ではなかったようだ。

むしろ、誰にも逆らわない私は、自己主張の強い年頃の子ども達にとって、かっこうのお人形ですらあった気がする。

私も、手を引かれて連れて行かれることに抵抗しなかった。

周りの言うとおりにしては、そこでじっとしていた。

それでよかった。ずっとそんな日が続くと思っていた。

学年が進むにつれ、私は「害」になっていった。
他人の視線がどんどんこわくなっていった私は、体育の授業にほとんど参加できないでいた。
「なんでさっちゃんは跳び箱しないんですか」
「なんでさっちゃんは〇〇しなくてもいいんですか」
みんなのストレスが、参加できない私へ向ってきた。
「家ではしゃべっているくせに」
「私だってしたくないのに」
大きな声で聞こえよがしに責め立てる。
私は、机に顔がつくほどにただうつむくばかり。
「害」になっていく自分。
「さっちゃんこっちょ。まってるからね」と、やさしく引かれていた手は、
「はやく、はやく。みんなこまってるんだよ！」
とぐいぐいとせきたてるものに変わっていった。

シカラレタクナイ・ケンカシタクナイ・シツパイシタクナイ・キラワレタクナイ
ただそれだけだったはずなのに、もうどうすればいいのかがわからない。
混乱すればするほど、体はかたくなる。
体をかたくすればかたくするだけ、責められてしまう。

一日中、下を向いてじっとしている。
「お地藏さんみたい」と誰かが言う。
おじぞうさんに、なれたらいいのに。
私はヒトだから、どんなに体を固くしても、みんなの声が聞こえてくるんだよ。
何も言わなくても、攻める視線を感じる。

「さっちゃん、次体育だけどうする？」
先生の問いかけに、さらに体を固くする。
「教室でまってる？」
さらに下を向く。
「そう、じゃあまってね」
あきらめたような、それでいてどこかほっとしたような先生の声。
「先生、いこういこう」
と、はしゃぐ声。楽しそうな声。
ワタシハイナイホウガイインダ
遠ざかっていく明るい声を聞きながら、涙が流れる。
置いて行かれることへの寂しさの涙？
答えられない自分への悔しさの涙？
それは自分でもわからない。
ただ、悲しさがつきることなくわいてきた。

それでも私は学校に行く。
行きたいから行くのか？
行かなければいけないから行くのか？
そこにいるのは、抵抗することすらあきらめた私。

朝はいつもゆううつだ。
顔を洗っているときも、ごはんを食べているときも、
着替えているときも、
なんともいえない重い気持ち。
8時が近づく。お母さんがせきたてる。
妹が元気よく飛び出していく。
私は？
私も一生懸命支度をする。
朝の制服は10キロぐらいの重さだ。
必死に袖を通す私を見て、
「なにをぐずぐずしてるの！」
と、母の声がとぶ。
「わかってる」
わかってる。がんばってる。泣きたくなる。

私は歩く。
首を下に直角に曲げて、足が動いているのを確認するようにして。
長く伸ばした前髪をたらし、周囲の好奇の目にふれないよう、
シャッターを下ろすかのようにして。
(今日はなにをきかれるんだろう)
(また動けなくなったらどうしよう)
先生のがっかりした顔、友達のいらいらした声、
浮かんでくるのはシツパイシテイル私。
校門をくぐる頃には、手のひらはじっとりと汗ばんで、
鼓動がはやまっているのがわかる。

「さっちゃんは何もしない」
友達は今も言う。
ウマクヤレナイ自分の姿に体がますますかたくなる。

「さっちゃん無視しないでよ！」
友達のいらいらした声。
チガウヨが言えないつらさ、
ソナナコトナイヨと伝えたいのに、視線さえあげられない。

怒って去っていく友達の気配を感じながら、
マタヘマヲシタと嘆き、
自分のせいで友達が傷ついたことを、
ワタシノセイダ、ワタシノセイダと責め続ける。

手足を硬直させ、あぶら汗を流しながら息を潜める一日の始まり。
それは、長い長い時間。
毎日繰り返される、つらい時間。

私は、いつもみんなのお荷物。
私は、私が大嫌いだっただ。

自分を否定してばかりいて、「こうしたい」も「こうしてほしい」も見えなかったあの頃。
今ならわかる。
私は、みんなと笑いあいたかった。
私は、みんなとかけまわりたかった。

やさしく声をかけてくれた人に、「ありがとう」と微笑みたかった。
担任の先生に「あのねあのね」といっぱい話しかけたかった。
無視しているんじゃない、拒否しているんじゃない、
ただどう示していいかわからなくて、とまどうちに一人になっていった。
したくなかったんじゃない。するのがこわかった。
見たくなかったんじゃない。見るのがこわかった。
しゃべれない自分、顔をあげられない自分、ウマクヤレナイ自分。
きっとみんな私を見て笑ってる。
きっとみんな私を見てあきれてる。
そんな思いが、どんどん私を動けなくしていった。

私は、誰かに許してもらいたかったんだと思う。

「そんなことじゃ、中学に入ってから大変だよ」
でなく、
「みんないやなことでもがまんしてがんばっているのに、わがままだよ」
でもなく、
「家ではできるのに学校ではしないなんてずるい」
でもなく、
もしも
ウマクヤレナイアナタデモイイヨ
イマノアナタガソノママデスクヨ
そういつてくれる人がいたら、

一度だけでなく、
反応できない私に、
信じずにはいられないほど、そう示し続けてくれる誰かがいたら。
ワタシハココニイテイインダ
そう思えたかもしれない。
私は変わったかもしれない。
ゆっくりと、亀が周囲をうかがいながら首を出すように、
顔をあげられたかもしれない。

あなたの側に、もしあの頃の私に似た子がいたのなら、
お願い、どうか手を離さないで。
握り返せないときも、拒んでしまうときさえ、
握られた手のぬくもりは、私の救いでした。

その子は、あなたを拒んでいない。
その子は、あなたを必要としている。
その子には、あなたの優しさが伝わっている。
その子の中には、いえなかった「ありがとう」と「ごめんなさい」がたくさん詰まっている。

それを知っていて欲しい。
しゃべらない＝感じないではないことを、わかってほしい。

それが、「話せない子」だった私の願いです。

最後まで読んでくれてありがとう。
あなたのぬくもりが、とても寒い場所で凍えている、
かつての私のような子ども達にとどきますように。

